

インクルーシブキャンプにおける危機管理マニュアルの活用(2)

——マニュアルの適切性の検討——

古城 恵子¹⁾・野澤 純子²⁾・浅野 涼太³⁾・池田 航⁴⁾

主藤 久枝³⁾・橋本 陽介⁴⁾

1) 帝京短期大学 生活科学科

2) 國學院大學 3) 白梅学園短期大学 4) 白梅学園大学

【抄録】

【問題・目的】小学生対象のインクルーシブキャンプを実施するにあたり、子どもの生命を守り安全を確保するため、危機管理マニュアルを作成した。危機管理マニュアルは、常に新たな知見・情報の変化に合わせて見直し修正していくことが重要である。本研究ではインクルーシブキャンプの実践を通し、危機管理マニュアルの内容を検証し、その適切性および課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】2024年8月に実施したインクルーシブキャンプの支援者24名を対象に、危機管理マニュアルの内容(①子どもの特性・体調の把握および共有, ②施設・野外活動場所等の安全管理, ③安全教育, ④連携および組織体制, ⑤事故等の対応)に従い適切に実施できたか, 危険な箇所や場面がなかったか, 記名自記式調査紙またはMicrosoft Formsによるアンケート調査を実施した。

【結果・考察】調査対象者24名のうち, 13名(54.2%)より回答が得られた。多くの項目において「適切」との評価が「要改善」を上回っていた。体調不良により保護者の迎えを要請した子どもが1名いたが, 受診を要する事故等は確認されなかった。キャンプの安全性については, 84.6%が「安全に実施できた」と回答しており, 危機管理マニュアルの妥当性についても肯定的な評価が得られた。一方で, すべての質問項目において「要改善」の指摘があり, その多くはヒヤリハット報告に関連していた。具体的には, 不適切な物品の使用や活動場所の危険性など, 環境的要因に対する危険認知の課題が示された。また, 調理・配膳に関しては, 明確なルールの整備が必要とされる状況が確認された。実地踏査では, 使用物品の種類や数, 多様な子どもが安全に活動できるかを確認し, 安全性を高めるための配慮が必要であった。さらに, 支援者間のオープンなコミュニケーションを促進し, 組織的な情報共有体制を強化することの重要性が示唆された。

【キーワード】インクルーシブ教育 キャンプ 危機管理マニュアル 発達障害児

I. 問題と目的

著者らは, 2023年8月に1泊, 2024年8月に2泊のインクルーシブキャンプを実施した。キャンプの対象は, 定型児および発達障害児である。インクルーシブキャンプは, 障害の有無にかかわらず同年代の子どもたちが, 日常(学校や家庭)とは異なる仲間と自然の中で過ごす活動であり, 子どもたちの満足そうな表情の変化や, 自ら輪に入るようになるなど, 発達障害児のポジティブな表情・思考・行動の変化が報告されている¹⁾。橋本・須川・宮田・佐藤・浅野・

主藤²⁾は, 本インクルーシブキャンプにおいて, 学年や障害の有無にかかわらず取り組めるプログラム活動を全員で楽しむことができ, それぞれの子どもが自分の役割を果たすことができたと報告する。

一方で, 活動には受傷や疾病のリスクが伴うため, 危機管理の意識が重要である。本インクルーシブキャンプを実施するにあたり, 子どもたちの生命を守り安全を確保する体制を確立するため, 2024年4月に危機管理マニュアルを作成した。

本キャンプでは, 危機管理マニュアルに基づ

き、事故等の対応訓練や危険予知トレーニング、実地踏査、保護者説明会およびオリエンテーション、そしてキャンプの実践を段階的に行った。

マニュアルの周知・確認として、1回目の実地踏査の前に、キャンプ運営を主に担うS大学3年生（以下、学生スタッフと表記）を対象に危機管理マニュアルの読み合わせを行った。学生スタッフ以外の支援者（以下、一般スタッフと表記）は、S大学の他学年の学生、ボーイスカウト（高校生以上の参加者・指導者）、大学教員等が含まれる。一般スタッフには、事前にマニュアルを配布し、内容の確認を依頼した。実地踏査2回目に、事故対応の訓練を行った際、マニュアルの内容について学生スタッフおよび一般スタッフの支援者間で認識に齟齬がないか、不明点等はないか確認を行った。

事前オリエンテーション時に、キャンプに参加する児童および学生スタッフを対象に危険予知トレーニングを行った。危険予知トレーニングは、キャンプ活動中に起こりうる危険について、事前に画像で提示し、それに対する回避行動を参加者自身が考える訓練である。学校・福祉・医療・交通安全などさまざまな場面で活用されている³⁾。

また、保護者説明会およびオリエンテーションでは、活動内容やスケジュール、宿泊施設などの詳細を保護者に伝え、安心してキャンプに参加できるよう不安や疑問の解消に努めた。さらに、子ども一人ひとりのニーズを把握し、学生スタッフ・一般スタッフ間で情報を共有し、連携体制を整えた。

2泊3日のキャンプ実践においては、体調不良

により保護者の迎えを要請した事例が1件あったが、受診を要する事故等は発生しなかった。これは、2回の実地踏査を踏まえ、支援者間で安全面を重視した活動内容の見直し・修正を行ったことが奏功したものと考えられる。

危機管理マニュアルは、一度作成すれば終わりというものではなく、常に新たな知見や情報の変化、参加する子どもの状況、活動内容に応じて改訂していくことが重要である。

インクルーシブキャンプの実践においては、作成した危機管理マニュアルが適切に機能しているか、改善を要する課題が存在していないかといった視点から、各項目を丁寧に見直し、評価を行う必要がある。

そこで本研究では、インクルーシブキャンプの実践を通し、作成した危機管理マニュアルの内容を見直し、その適切性および課題を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象

本研究の調査対象者は、2024年8月、2泊3日のインクルーシブキャンプに参加した支援者として参加した学生スタッフ8名および、一般スタッフ16名の計24名である（Table 1）。

なお、参加した児童は、K市小学校（特別支援学級を有する普通校）に在籍する定型児5名および発達障害児5名の計10名であった。

2. 調査方法

インクルーシブキャンプの取り組み（保護者

Table 1. インクルーシブキャンプの参加者

参加者種別	所属	人数
児童	K市小学校（特別支援学級を有する普通校）に在籍する小学生	10（発達障害児5名を含む）
学生スタッフ	S大学3年生	8
一般スタッフ	S大学4年生	2
	大学教員	6
	ボーイスカウト指導者	2
	ボーイスカウト大学生	4
	ボーイスカウト高校生	2

説明会、オリエンテーション、2回の実地踏査および2泊3日のキャンプ実践)について、危機管理マニュアルの内容に従い適切に実施できたか、危険な箇所や場面がなかったか、記名自記式調査紙またはMicrosoft Formsによるアンケート調査を実施した。

調査期間は、2024年9月～11月末日であった。

3. 調査内容

マニュアルの主な内容である(1)子どもの特性・体調把握および共有、(2)施設・野外活動場所等の安全管理、(3)安全教育、(4)連携および組織体制、(5)事故等の対応、の5項目に関する実際の取り組みについて、3件法(適切、要改善、不明)で回答を得た。要改善および不明の場合、その理由について記述回答を得た。また、キャンプ全般に対する危機管理・安全対策の気づきについて自由記述で回答を得た。

4. 倫理的配慮

質問紙に説明書を添付し、本研究の目的と方法および研究参加・辞退の自由意思の尊重、個人情報保護、研究結果の公表等について記した。質問紙の回収もしくはFormsの回答をもって、同意を得たと判断した。なお本研究は、帝京短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:2024-1)。

Ⅲ. 結果および考察

1. マニュアルの適切性および課題

調査対象者24名のうち13名(54.2%)より回答を得た。学生スタッフは男性3名、女性4名の計7名であり、平均年齢は20.6±0.5歳であった。一般スタッフは男性・女性各3名、計6名であり、平均年齢は47.0±14.5歳であった。

アンケート調査結果の概要をTable 2に示す。質問項目は①～⑱で構成され、①～⑰の問いは3件法で回答を得たものであり、質問⑱はキャンプ全般に対する危機管理・安全対策の記述である。

質問⑧⑩⑪を除く質問項目の回答において、適切は要改善より高値であった。子どもの支援者である学生スタッフおよび一般スタッフの多くが、インクルーシブキャンプの取り組み(保護者説明会、オリエンテーション、2回の実地踏

査および2泊3日のキャンプ実践)について適切と捉えていた。体調不良のためお迎えを依頼した事例が1件発生したが、受診を要する事故等はなかった。質問⑱の全般的に見たキャンプの安全性については、84.6%が安全に実施できたと回答しており、危機管理マニュアルの適切性についてもポジティブに評価されたと考える。

質問⑧の水遊びの活動に関する危険性については、適切が23.1%、要改善が46.2%であり、要改善の方が高値であった(適切<要改善)。質問⑩のテント張りの活動に関する危険性について、適切が38.5%、要改善が46.2%であり、要改善の方が高値であった(適切<要改善)。質問⑪のキャンプファイヤーに関する危険性については、適切および要改善が各々38.5%であった(適切=要改善)。これらの活動について、支援者の半数近くが課題として捉えており、子どもの安全を確保するためにも、再検討を要すると考える。また、全ての質問項目で要改善が認められ、記述内容を見ると、その多くがヒヤリハットに関する内容の報告であった。要改善の視点について、危機管理マニュアルを構成する5項目の内容に沿って考察する。

なお、回答で「不明」と記された項目は、質問⑮と⑯以外の全ての問いで認められた。これは、調査対象者が役割分担上、その活動等に参加していなかったため答えられず、「不明」としたものである。

(1) 子どもの特性・体調の把握と共有

子どもの特性および体調の把握と共有に関する内容は、質問①が主に該当する。

1) 子どもの特性の把握と共有

質問①の参加者情報(持病・障害・アレルギーその他配慮すべき情報)の把握・共有については、適切が69.2%、要改善が23.1%であり、適切の方が高値であった(適切>要改善)。要改善の記述内容を見ると「子ども同士の関係性や組み合わせを知っているとトラブルも防げると考える」と、情報の共有における課題が認められた。また、質問⑮のキャンプ全般の安全に関する記述に、子どもの特性理解の必要性や、発達障害を有する子どもとの関りの中で戸惑いも認められた。自閉スペクトラム症(ASD; Autism Spectrum Disorder)と診断されている男児1名は、

Table 2. インクルーシブキャンプにおける危機管理マニュアルの適切性に関するアンケート結果

質問および回答の内容	n (%)	要改善の内容記述 (質問①～⑦)				
①保護者説明会やオリエンテーションで得られた参加者情報 (持病・障害・アレルギー・その他配慮すべき事項) の把握・共有について、適切に実施できましたか？						
適切	9(69.2%)					
要改善	3(23.1%)	医学的な情報は所定用紙に基づき確認が出来ていたが、配慮事項などの聞き取りは、聞き手の裁量によるところが大きく、また情報量のバラつきが生じやすいように感じた。	子どもの情報の中で、子どもの関係性などによって起こり得ることを (情報として) 教えてくれると、子ども間のトラブルも防げると考えた。	個人情報のため、どこまで把握するか明確になっていなかった。		
わからない	1(7.7%)	不参加				
②実地踏査 (現トレ) について、適切に実施できましたか？						
適切	6(46.2%)					
要改善	5(38.5%)	現トレの1回目でマップの上のほう、2回目でマップ下の方の実地踏査が行われ、2回目を行う際に1回目で確認した危険を忘れていた。本番の際に起こりうる危険の予測ができていなかった。	学生スタッフ (主となる) が子どもがいる想定の実地トレーニングを行えず、事前準備が不十分であった。	調理場での事前確認は、当日の状況を想定し実施できた。しかし、二泊という事を踏まえた現トレのあり方は検討すべきであると思う。	本番を想定した現トレが行えなかった	現トレ時点では、あいまいな状態であった。流れとして不明な点が多かった。
わからない	2(15.4%)	全て参加したわけでは無いので、わからない	不参加			
③実地踏査 (現トレ) における危険個所の共有について、適切に実施できましたか？						
適切	11(84.6%)					
要改善	1(7.7%)	マニュアルに地図を載せるなど、工夫が必要				
わからない	1(7.7%)	不参加				
④実施計画書の策定について、適切に策定できましたか？						
適切	9(69.2%)					
要改善	2(15.4%)	もう少し食事場面など、実際の料理してくださる方と流れなどを一緒に確認する機会を持ってよかった。私たちの想像したものとスタッフさんが想像していたものが違っていたことがあったため。	行動予測が難しい子どもの危険予知ができていなかった (特定の子どもに対して)			
わからない	2(15.4%)	実施計画策定に関わっていないので、わかりません。	不参加			
⑤「安全マニュアル」の読み合わせは、適切に実施できましたか？						
適切に実施できた	8(61.5%)					
不適切であった	2(15.4%)	一回で終わりにするのではなく、複数回に分けてやったほうが、記憶に残りやすい。				
わからない	3(23.1%)	不参加				
⑥応急手当研修について、適切に実施できましたか？						
適切	7(53.8%)					
要改善	1(7.7%)	嘔吐処理やパルスオキシメーターの使用について、学生スタッフに周知すると良かった。				
わからない	5(38.5%)	不参加				
⑦キャンプ1日目のバス移動・トイレ休憩で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	6(46.2%)					
要改善	2(15.4%)	トイレ休憩で子どもがそれぞれ分けられてしまうことがあり、参加児童を見失う恐れがあった。	夏休みで車が多かった。他の子どもも多かった。			
わからない	5(38.5%)	バスに乗車していなかった	バスに同乗していなかった	現地に先に行っていたため、わからない		

キャンプ3日目のバス移動・トイレ休憩で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	6(46.2%)					
要改善	1(7.7%)	行きよりも警戒が薄くなってしまったため、子どもに目が届きにくくなったり、バス移動中、子どもの体調に目が届きにくく、配慮できなかった。				
わからない	6(46.2%)	バスに同乗していなかった	不参加			
⑧キャンプ1日目の活動（水遊び）で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	3(23.1%)					
要改善	6(46.2%)	学生スタッフが総じて水遊びに参加しており、ふらっと集団を抜け出す児がいた時にはスタッフが対応していました。全体の状況を俯瞰的にみておく学生スタッフも役回りとして必要かと感じました。	水温が低く寒がっていた子が多く、入浴したくても待機が続く状況で、健康上のリスクを感じた。（同様の意見がほか3件）	顔に水がかかるのが苦手な子がプール内で遊んでおり、他の子から水を頭にかけられていたため危険だと感じた。水が耳に入ったり、コンタクトがずれかけた。	水風船があたり、痛かった。あざができた。投擲物により、子どもがケガをする恐れがある。（同様の意見がほか1件）	崖が近くにあり、落ちやすくなっていた。
わからない	4(30.8%)	不参加	私は外側でゆっくり水遊びをしていたため（全体を把握しきれていなかった）			
⑨キャンプ2日目の活動（野外炊飯）で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	6(46.2%)					
要改善	5(38.5%)	かまど周辺で、暑すぎてぐったりしそうな児がいても、スタッフも炊事に忙しすぎ声かけしたり、移動させたりはしていなかった。持病のある児が参加の際は移動や冷却タオル配布など、どんな場合に何をすべきかを学生が事前に検討するとよいかもされない。	火元がどうしても近くなってしまうため危険。（同様の意見がほか1件）発生する煙や炭などに気管へのダメージが多少なりとも見られた。	包丁の使い方が適切でない児への言葉がけが遅かった。	こども包丁が足りなくて、大人の包丁を使っている児がいた	食料がどこにあるかわからない時があった
わからない	2(15.4%)	全ての工程に参加していなかった	不参加			
⑩キャンプ2日目の活動（テント張り・休息）で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	5(38.5%)					
要改善	6(46.2%)	子どもの出入りがあり、人数確認など、子どもの把握が不十分な点があった。（同様の意見がほか4件）	川の奥まで子どもたちが進んでいってしまった場面があった	テントの下にあった川においていったが、すべりそうで少し怖かった。		
わからない	2(15.4%)	不参加				
⑪キャンプ2日目の活動（キャンプファイヤー）で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	5(38.5%)					
要改善	5(38.5%)	水遊びと同内容です。暗間で児の動きを確認し難いため、子どもやスタッフも一緒に参加しつつ、同時に全体を見ておく立場の者も1-2名必要かとも感じました。	視野が狭く、危険か否かの判断が乏しい。結果オーライであったが、あやうさを感じる。（同様の意見がほか2件）	キャンプファイヤーに行くまでの道が暗く、崖になっているのが心配だった		
わからない	3(23.1%)	移動はスタッフがよく支援していた。全体的に危険は感じなかったが、暗すぎて安全だったかは確認できなかった。	活動の中心だったため、子どもの行動を他の学生スタッフよりも観察できていなかったため。	不参加		

⑫ キャンプ3日目の活動（すいか割り）で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	5(38.5%)					
要改善	4(30.8%)	下がコンクリートなので、回った後にバランスを崩して転倒する恐れを感じた。	子どもが棒をもって移動しているときに周りにいて、当たりそうで怖かった。	地面がコンクリートであったため、転んだ際、危険だと感じた。	バットの管理	
わからない	4(30.8%)	他業務にて不参加でした。	不参加			
⑬ キャンプ3日間のおやつ・食事で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	9(69.2%)					
要改善	3(23.1%)	食堂の配膳の児童がしゃべりすぎたり、手洗い後のペーパータオルの準備が不確かで不衛生になりかねない、と思う場面が複数あった。（同様の意見がほか1件）	かき氷を触る、舐めた指で触るなどもあり、ルールが必要だと思った。（同様の意見がほか1件）	調理や配膳に関し、ある程度約束事を明確にし、事前に周知した方が良い。	余ったお菓子をキャンパー間で交換しており、危険と感じた。	
わからない	1(7.7%)	不参加				
⑭ キャンプ3日間の入浴で、危険と感じたことはありましたか？						
適切	8(61.5%)					
要改善	2(15.4%)	お風呂で飛び込みをしている場面が見られた。	飛び込み行為があった。			
わからない	3(23.1%)	入浴支援に関わらなかった。	別業務のため不明			
⑮ 全般的に見て、キャンプは安全に実施できたと思いますか？						
適切	11(84.6%)					
要改善	2(15.4%)	こども一人ひとりに気遣いできずに終えてしまった。今後、子どもの特性理解、体調配慮をより深める必要があると考えた。	安全確認はできていたが、ADHDの子やASDの子の行動に惑わされ、スタッフ・リーダーの人員が足りなくなることがあった。			
わからない	0					
⑯ あなたの周りでは、事故（ささいなケガを含む）がありましたか？						
なかった	11(84.6%)					
あった	2(15.4%)	参加児童の体調不良。嘔吐、喘息の疑い	嘔吐			
わからない	0					
⑰ 事故対応は適切に実施できたと思いますか？						
適切	10(76.9%)					
要改善	1(7.7%)	ケガの消毒等がなかった				
わからない	2(15.4%)	事故はなかったと思う				
⑱ キャンプ全般（現トレを含む）を通し、危機管理・安全対策の視点でお気づきのことについて、ご自由にお書きください。						
<p>・プログラムとプログラムの間や、夜など、その時に子どもに合わせての行動を話し合い対応をしました。誰かしら子どもと一緒にいるよう離れるときは声をかけるなど工夫しました。</p> <p>・学生スタッフやサポートする側が、本番で初めて二泊するという状況に、不安があった。実際の活動日程に沿った現トレが必要であると思った。（参加児童や学生の体力や健康面も考慮）</p> <p>・衛生も含む場合には、食事やおやつ場面のルールや安全に行うための環境整備などの工夫が必要だと思った。</p> <p>・現トレから学生スタッフ同士の連携を深めると同時に、子どもの関係性を理解することで起こりうる事故等のトラブルを防げることができると考えた。</p> <p>・現トレと本番のプログラムをリンクさせたほうが良いと感じた。</p> <p>・現トレを通してキャンプ本番に向けて安全や危険など詳細に共有できていたと思います。</p> <p>・自分があまり研修を受けることができませんでした。</p> <p>・自分たちの目で見ると危険と感じたところを共有することで子どもへの安全を提供するときにどのような声掛け・対策をすればよいかイメージしやすくなっていた。</p> <p>・初めて参加する子どもの情報がわからなかった。夜のリーダー会議の時、子どもだけでトイレに行っていたのが心配だった</p> <p>・声の掛け合いの重要性を予め伝えていたが、実践できて良かった。</p> <p>・食事の配膳の際、手袋やマスクを使用したり児者によってはそれが十分ではなさそうだったりする状況があったかと思います。</p> <p>・嘔吐処理の方法について聞きたかった</p> <p>・毎回の食事の後に体調チェックを実施し、学生スタッフおよび一般スタッフ間で共有できたのは良かった。その後の体調不良児の対応もスムーズに実施できた。</p>						

集団行動が苦手なため、学生スタッフと常に1対1で関わりながら活動に参加していた。学生スタッフは、対象児を集団に馴染ませたいという焦りから、戸惑いが認められたものとする。

発達障害児は、障害の特性やその程度が一人ひとり異なり、その様相は様々である。発達のある分野で高い能力を示す一方で、他の分野では困難を抱えるといった発達の偏りを有することが多い。特性のアンバランスさから、環境の変化に適応しにくく強いこだわりを持つことがあり、その結果、他者との会話やコミュニケーションがうまくいかない等、対人面に困難を抱えている場合が少なくないといわれる⁴⁾。小林⁵⁾は、発達障害児が安心できる環境の中で、他者と心地よく過ごす体験を通して成長すると指摘している。問題行動を直接的に修正するのではなく、楽しさを通じて関わりを促す支援は、感情のコントロールに肯定的な影響を与えるとされる⁵⁾。したがって、支援者には、ポジティブな姿勢で子どもに接することが求められる。発達障害を有する子どもと関わる際、支援者は、子どもの気持ちに寄り添い、前向きに活動へ参加できるよう互いに声を掛け合うとともに、臨機応変な個別対応も求められると考える。

また、インクルーシブキャンプ実践に先駆け、学生スタッフや経験の浅い一般スタッフを対象に、子どもたちに対する接し方や、発達障害に関する研修を実施することも有効と考える。

2) 子どもの体調の把握および共有

質問⑩の危機管理に関する自由記述の中で、「毎回の食事の後に体調チェックを実施し、学生スタッフおよび一般スタッフ間で共有できたのは良かった。その後の体調不良児の対応もスムーズに実施できた」というものがあった。学校において教職員により行われる健康観察は、日常的に子どもの健康状態を観察し、心身の健康問題を早期に発見して適切な対応を図り、学校における教育活動を円滑に進めるための重要な活動である。特に小学校における朝の健康観察では、呼名し健康状態を申告させる方式が多く採用されている⁶⁾。一人ひとり呼名をし、声を交わすことにより、声のトーンや表情、顔色で身体症状のみならず心の状態の判断に役立つとされる⁶⁾。さらに「健康状態申告方式」のメリットとして、自分の健康状態を自分の言葉できち

んと伝えることができるようになる可能性も指摘する⁷⁾。本インクルーシブキャンプでは「症状読み上げ方式（観察項目毎に子どもにその症状がないかを問いかけ挙手させる方式）」を採用していたが、「健康状態申告方式」の活用も視野に入りたい。

また、健康観察を通し気づいた体調等の変化について、周囲の者が情報を共有し、多くの目で子どもを観察することで、健康課題の早期発見・早期対応に繋がるといわれる⁶⁾。情報共有について「組織内の各グループ間や職員間で情報を隠蔽することなく交換し、情報を組織内で滞りなく循環させること」⁸⁾と定義され、打ち合わせや会議における情報共有だけでなく、そこに携わる者同士の立ち話や、ちょっとした報告も重視される。安全管理のために、過去の失敗事例やベテランのもつノウハウ・知識・経験をメンバー間で継承・共有することが重要である。そのためには、組織内の情報共有を促すオープンなコミュニケーションが有効であると指摘されている⁹⁾。オープンコミュニケーションは、誰でも気軽に話せる環境を整えることであり、互いの考えや感じていることを共有しやすくなり⁸⁾、アイディアが一般的な意見と異なっている場合でも、考えや意見を積極的に交換することにつながるといわれる。質問①の記述回答に「配慮事項などの（保護者からの）聞き取りは、聞き手の裁量によるところが大きく、また情報量のバラつきが生じやすい」という記述があったが、オープンコミュニケーションを活用することで、ばらつきのある情報を支援者全員で整理し共有することにつながる&思考する。本インクルーシブキャンプにおいて、組織的に情報共有に努める必要があり、支援者間のオープンコミュニケーションを重視し取り組んでいきたい。

(2) 施設・野外活動場所等の安全管理

施設・野外活動場所等の安全管理に関する内容は、質問②～④が主に該当し、一つひとつの活動内容については質問⑨～⑫、生活場面の内容については質問⑬⑭から課題が抽出された。

質問②の实地踏査の適切性については、適切が46.2%、要改善が38.5%であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると「本番を想定した現トレ（現地トレーニングの略、实地踏査と同義）が行えなかった」

「現トレではあいまいな状態であった。流れとして不明な点が多かった」とキャンプ運営を担う学生の实地踏査に関する認識に課題があることが示された。实地踏査は、特定の場所を実際に訪れて観察し、調査を行うことであり¹⁰⁾、現地を訪れることで潜在的な問題やリスクを早期に発見し、計画の修正や対策の立案を迅速に行うことに役立つ。キャンプの大まかな工程に従い、キャンプ地までの移動中の安全確認、キャンプ地の環境や設備の安全確認、一つひとつのプログラムの内容や、必要な準備物等の点検・確認を行う必要がある。また、質問③の实地踏査における危険箇所の共有については、適切が84.6%、要改善が7.7%であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると「マニュアルに地図を載せるなど、工夫が必要」というものであり、危機管理マニュアルに实地踏査で得られた危険箇所について地図を用いて表示をし、支援者間の情報共有を図る必要性が認められた。質問④の実施計画書策定の適切性に関しては、適切が69.2%、要改善が15.4%であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると、「行動予測が難しい子どもの危険予知ができていなかった」と子どもの特性と活動内容との不一致が認められた。实地踏査の時点で、子どもの特性を把握し、活動内容に無理がないか、どのような配慮を要するかといった視点をもって臨みたい。

質問⑧～⑫の一つひとつの活動内容および質問⑬⑭の生活場面については、施設・活動場所等の安全管理の課題が示された。質問⑧の水遊びについては、水風船が顔に当たる危険性や水温の低さが認められた。

質問⑨の野外炊飯については、適切が46.2%、要改善が38.5%であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると、子ども用包丁の不足に伴い、大人用の包丁使用が認められ、危険認知が高まった。質問⑫のすいか割りについては、適切が38.5%、要改善が30.8%であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述からは、使用するバットが周囲の人に当たる危険性があることが確認された。物品を子どもが振り回すことで、思わぬ事故につながる可能性があるため、学生スタッフや一般スタッフが責任をもって管理する必要

がある。また、子どもが物品を不用意に投げたり振り回したりする可能性もあることから、使用方法や危険性について、その都度丁寧に伝えることが重要である。状況に応じた柔軟な安全教育の実施が、安全確保において不可欠である。

質問⑩のテント張り・休息では、「テントの下にあった川におりていったが、すべりそうで少し怖かった」や、質問⑫のすいか割りでは「下がコンクリートなので、回った後にバランスを崩して転倒する恐れがあると感じた」と、テント設置場所やすいか割りの場所など、活動場所について、複数の目で安全確認を行う必要性が認められた。質問⑪のキャンプファイヤーでは、「キャンプファイヤーに行くまでの道が暗く、崖になっているので心配だった」や「視野が狭く、危険か否かの判断が乏しい」とあり、ランプ設置があったものの、さらなる配慮の必要性が認められた。

質問⑬の食事・おやつに関しては、適切が69.2%、要改善が23.1%であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると、「かき氷をなめた指で触るなど、ルールが必要」「食堂の配膳の子どもがしゃべりすぎたり、手洗い後のペーパータオルの準備が不確か」など、衛生的な環境保持のため調理・配膳に関してルールを決めた対応の必要性が認められた。

このように、事故には至らなかったもののヒヤリハット報告が散見された。重大な事故へとつながる前に、多くのヒヤリハットの内容を検討し対処していくことが、事故を未然に防ぐことへとつながるといわれる¹¹⁾。村越・若月¹²⁾は、野外活動の中には潜在的な危険があるとは言え、重大な事故はそれほど多いわけではないという。しかし、その背後には多くのヒヤリハット事例があり、ヒヤリハット事例の情報共有は実際の傷害やその危険度の予測に役立つものとされる。多くの研究で、炊飯時のやけどや刃物のけが、転倒や打撲などの発生確率が高く推察されており¹²⁾、本インクルーシブキャンプにおいても支持する結果が認められた。ヒヤリハット情報を支援者間で共有し、適切に対応できるよう、マニュアルに反映させていく必要があると考える。

(3) 安全教育

安全教育に関する内容は、質問⑤⑥が該当する。質問⑤危機管理マニュアルの読み合わせに

については、適切が 61.5%、要改善が 15.4% であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると「1回で実施するのではなく、複数回に分けて実施した方が、記憶に残りやすい」という意見が認められた。また、⑥応急手当研修については、適切が 53.8%、要改善が 7.7% であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると、「嘔吐処理やパルスオキシメーターの使用について周知されると良い」とあり、これらについては危機管理マニュアルの中に追加し、研修も充実させていく。

特にマニュアルの読み合わせは、経験の浅い学生スタッフに対して実地踏査前と実地踏査中に分けて実施する。また、キャンプ実施前には、実施計画書とマニュアルの整合性を確認する。

危険予知トレーニングの適切性については、特に課題は認められなかった。しかし、キャンプ実施前のオリエンテーションという限られた時間の中で実施しているため、内容を含めて改めて精査し、評価していく必要がある。特に子どもを対象とした内容については、活動の直前に、活動内容に即した危険予知トレーニングを行うことで、子どもたちの安全意識を高める効果が期待できると考える。

(4) 連携および組織体制

子どもたちの支援者である学生スタッフおよび一般スタッフ間の連携・組織体制の内容については、質問⑦～⑫の一つひとつの活動内容や質問⑬⑭の生活場面より課題を抽出した。

質問⑦のバス移動・トイレ休憩においては、1日目・3日目双方で適切（危険なし）の方が不適切（危険あり）より高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると、車・人が多く、子どもを見失う危険性が示されており、支援者間の一層の声かけとともに臨機応変な役割分担の必要性が認められた。

質問⑧の水遊びの危険性については、「学生スタッフが総じて水遊びに参加しており、ふらっと集団を抜け出す児がいた時には一般スタッフが対応していた」と記述があった。『学生スタッフが対応すべき』という内容が読み取れるが、学生スタッフおよび一般スタッフの両者はいずれも子どもたちの支援者であり、互いに声をかけ合い、一つの組織として『子どもの安全を守

る』目的が達成できれば良いと考える。

また、質問⑨の野外炊飯において、かまど周辺の暑さや煙に関する体調悪化の危険性や、質問⑩のテント張り・休息における子どもの把握が不十分な状況（5件回答あり）のほか、質問⑫キャンプファイヤーにおいて「暗闇で児の動きを確認し難い（4件回答あり）」状況が認められた。質問⑭入浴における危険性については、適切（危険なし）が 61.5%、要改善（危険あり）が 15.4% であり、適切の方が高値であった（適切>要改善）。要改善の記述内容を見ると、子どもの飛び込み行為に対する注意喚起が不十分な状況が認められた。注意は限定的な資源であるため、一つの対象に集中すると他への注意が向けられず、不注意による見落としが生じる危険がある。複数課題の同時遂行や非日常的な状況下におけるパフォーマンス低下は、この注意資源の制約に起因すると考えられている¹³⁾。また、状況変化の生じる場面においては、他者からの声かけが注意の幅を広げ、周囲の変化への気づきを促す知覚的効果が指摘されている¹³⁾。本インクルーシブキャンプにおいても、危険を感じた際には、支援者間で積極的に声をかけ注意を促し、事故予防に努めていくことが重要である。特にキャンプを主に担う学生は、経験が浅く、子どもと接する機会も限られているため、危険への気づきが不十分になりやすい。インクルーシブキャンプではさまざまな問題が生じることが想定されるため、各班にベテランスタッフと初参加または経験の浅いスタッフを配置し協働できる体制を構築する必要性が指摘される¹⁴⁾。障害のある子どもを含む子どもたちへの関わり方は、ベテランスタッフの動きや声かけを通じて、若手が学んでいく¹⁴⁾。キャンプの計画や実地踏査、インクルーシブキャンプの実践の中で、経験豊富なスタッフが危機管理や安全対策に関する気づきをその都度、経験の浅い学生スタッフ等に伝えていくことは重要である。また、ベテランスタッフが意識的に学生スタッフに声を掛け、ヒヤリハットを含む情報を共有する姿勢は、両者の協力関係をさらに深めると考える。

(5) 事故等の対応

事故等の対応については、質問⑮～⑰より抽出した。質問⑯事故（ささいなケガを含む）については、適切（事故なし）が 84.6%、要改善

(事故あり)が15.4%であり、適切の方が高値であった(適切>要改善)。要改善の記述内容を見ると体調不良(嘔吐・喘息の疑い)の報告が認められた。⑰事故対応の適切性については、適切が76.9%、要改善が7.7%であり、適切の方が高値であった(適切>要改善)。要改善の記述内容を見ると課題は認められなかったが、質問⑥の応急手当研修等の記述に「嘔吐処理の方法について聞きたかった」とあり、危機管理マニュアルに加え、いざというときに誰でも対応できるよう訓練を行っていく必要がある。

また、⑱全般的にみたキャンプの安全性については、適切が84.6%、要改善が15.4%であり、適切の方が高値であった(適切>要改善)。

本インクルーシブキャンプにおいて、幸い重大事故の発生は認められなかったが、十分な対策を講じても危機の発生を完全に防ぐことは難しいといわれる^{15,16)}。事故は当然起こり得るものとして想定し、訓練を含む安全教育を実施する。危機的状況が発生した際には、応急手当や通報とともに、受傷児等の保護者への連絡や他の子どもへの対応など多くのことが求められる。支援者である学生スタッフおよび一般スタッフは、事故等の発生時の対応について共通理解を持ち、組織的な対応が行えるようにすることが重要である。

2. 新たな事故防止策の必要性

アメリカ合衆国教育省¹⁷⁾は、「学校・地域危機管理ガイド」の中で、危機管理の概念を「緩和・防止」「準備」「対応」「回復」の4段階のサイクルとして捉え、計画を状況に応じて修正していく必要性を示す。本研究において抽出された課題も、新たな事故の可能性として位置づけ、防止策を検討・準備することが重要である。

マニュアル(1)「子どもの特性および体調の把握と共有」については、子どもの特性と活動内容との不一致が見られ、特性理解や情報共有、さらに実地踏査に対する認識に課題があることが示された。

マニュアル(2)「施設・野外活動場所等の安全管理」では、物品に関する危険要因として、不適切な包丁の使用、水遊びで使用した水風船および、すいか割りで使用したバットの危険性が認められた。環境面では、テント設営やすいか割りの場所の危険性、水遊びの不適切な水温

管理、キャンプファイヤーにおける視野の狭さが課題として確認された。実地踏査において、活動で使用する物品の種類や数、多様な子どもが安全に活動できるかを確認し、安全性をさらに高める配慮が求められる。

マニュアル(3)「安全教育に関する取り組み」では、マニュアルの読み合わせ方法の工夫に加え、危険マップやヒヤリハット事項の追加、調理・配膳に関するルール策定の必要性が示された。また、発達障害を有する子どもの特性理解に関する事前研修の必要性も認められた。

マニュアル(4)「連携および組織体制」では、危険な状況に気づいた際には、学生スタッフおよび一般スタッフが声を掛け合い、情報を共有して協働する体制づくりが重要である。

マニュアル(5)「事故等の対応」については、嘔吐処理法を危機管理マニュアルに加え、緊急時に誰もが対応できるよう準備を整える必要がある。

以上の分析から、インクルーシブキャンプの運営においては、子どもの特性理解、安全管理、安全教育、組織体制、さらには事故対応に至るまで、包括的な視点から危機管理を強化する必要性が確認された。これらを踏まえ、2025年度版インクルーシブキャンプ実施マニュアルを改訂する。新たな対応については研修を実施し、安全を確保する体制をより強固なものにしていく。

なお、本研究はJSPS 科研費JP24K05799の助成を受けた。

【引用文献】

- 1) 竹内靖子, 石田易司, 野口和行, 高瀬宏樹(2020) キャンプの魅力・課題・環境づくり ―主に発達障がい児キャンプに注目して―, 桃山学院大学総合研究所紀要, 46(1), 19-37.
- 2) 橋本陽介, 須川公央, 宮田まり子, 佐藤文, 浅野涼太, 主藤久枝(2024) あいあいキャンプ, 白梅学園大学・白梅学園短期大学子ども学研究所研究年報, 24(29), 53-53.
- 3) 田中住幸, 能篠歩(2020) 楽しくやろう! 危険予知トレーニング ワーク所ショップ素材集, NPO 法人北海道自然体験活動サポートセンター, 北海道.
- 4) 氏家享子(2018) 発達障害児へのソーシャ

- ルスキル・トレーニングに関する実践研究—小集団のメリットを活かしたかかわり感, 教育・教職センター 特別支援教育研究年報, 35-50.
- 5) 小林正幸 (2018) 巻頭言 学校や社会への適応のために必要なこと, 発達教育, 447, 3.
- 6) 石山志央子, 小林央美, 新谷ますみ (2016) 学級担任が行う健康観察に関する実態調査, 弘前大学教育学部紀要, 116 (2), 31-36.
- 7) 杉浦守邦 (1992) 健康観察のすすめ方マニュアル, 21, 東山書房, 京都府.
- 8) 山口生史 (2018) 高齢者介護施設におけるケアの質の認識と職員間の情報共有との因果関係, 日本コミュニケーション学会, 46 (2), 131-149.
- 9) 藤野秀則, 下田宏, 石井裕剛, 北村尊義 (2015) 休憩中の雑談が職場内の知識継承・情報共有に与える影響の調査, システム・情報部門学術講演会
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/236125/1/SSI2015_GS6-5.pdf
(2025/8/12 アクセス)
- 10) 広辞苑第7版 (2018) 新村出 (編), 岩波書店, 東京都.
- 11) 迫田裕子, 兵藤好美, 田中共子 (2011) ヒヤリハットに関する研究の動向—着護師を対象とした研究を中心に, 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 32, 15-24.
- 12) 村越真, 若月朋子 (2007) 組織キャンプにおける指導者およびキャンパーのヒヤリハット事例の認知, 野外教育研究, 11 (1), 73-82.
- 13) 申紅仙 (2001) 五感を活用した安全教育プログラムの開発・実施とその効果 1) —プログラム実施前後の職長・作業員の意識の変化について—, 産業・組織心理学研究, 15 (1), 65-72.
- 14) 荻原豪人, 岡本亜美, 木村陽介, 赤坂誠人 (2014) 地域のニーズに合わせて柔軟に変化し続けるキャンプの組織体制およびプログラムの実践報告, コミュニティ心理学研究, 18 (1), 109-128.
- 15) 文部科学省, 学校事故対応に関する指針と学校管理下における重大事故事例,
<https://anzenkyouiku.mext.go.jp/guideline-jikotaiou/jirei.html> (2025/8/12 アクセス)
- 16) 齋藤歎能, 渡邊正樹 (2006) 学校安全と危機管理, 大修館書店, 東京都.
- 17) The U.S. Department of Education (2003) Practical information on crisis planning A guide for school and communities.
Practical Information on Crisis Planning (PDF)
(2025/8/12 アクセス)

Use of Risk Management Manuals at Inclusive Camps (2): —Examining the Appropriateness of a Manual—

Keiko KOJO¹⁾ • Junko NOZAWA²⁾ • Ryota ASANO³⁾ • Wataru IKEDA⁴⁾

Hisae SHUTO³⁾ • Yosuke HASHIMOTO⁴⁾

1) Department of Living Science, Teikyo Junior College

2) Kokugakuin University 3) Shiraume Gakuen Junior College 4) Shiraume Gakuen University

[abstract]

[Purpose] A risk management manual was created to protect elementary school students' lives and ensure their safety during an inclusive camp. Such a manual needs to be reviewed and revised in accordance with constant updates in knowledge and information. This study sought to verify that manual's content through its implementation at an inclusive camp and to ascertain its appropriateness and issues.

[Methods] Twenty-four personnel at an inclusive camp conducted in August 2024 were surveyed via self-administered questionnaire or Microsoft Forms regarding whether risk management was properly implemented in accordance with the manual ((1) ascertaining and sharing the characteristics and physical condition of children, (2) safety management for facilities and sites of outdoor activities, (3) safety education, (4) a system of coordination and organization, and (5) responses to accidents and the like).

[Results and Discussion] Thirteen (54.2%) of the 24 potential survey participants responded to the survey. Many of the items were deemed "appropriate" more so than "needs improvement." A parent/guardian had to be called to come pick up an unwell child, but there were no instances where medical attention was required. Eighty-four-point-six percent of the respondents felt the camp was conducted safely, and respondents viewed the risk management manual as appropriate. That said, every item had a response of "needs improvement," which was mostly related to close calls. Responses indicated issues with risks involving environmental factors, such as use of inappropriate equipment and inappropriate site selection. Responses also revealed that clear rules for food preparation and serving needed to be laid out. During the on-site inspection, care must be taken to improve safety, such as the types of equipment used and whether children can use them safely. In addition, open communication needs to be promoted among camp personnel and an organized system needs to be created to share information.

[Key words] inclusive education, camp, risk management manual, developmentally disabled children